フロイトとヘルバルト。とくにリントナー編『経験的心理学教本』について

岩　切　正　介

Die Beziehung zwischen Freud und Herbart : Lindners Lehrbuch von Psychologie

教育学部　独語教室

Masaaki IWAKIRI

フロイトの学説（精神分析）の成立を問題にする場合，検討すべき方面はおよそ三つに分かれるだろう。

ひとつは，広義の影響関係で，間接的一般的で基盤的なものである。フロイトの育った家庭や環境，フロイトが受けた教育や個人的な体験，さまざまな読書体験，交友やユダヤ人であったための特殊な体験など，おもに個人的で具体的な経験要因である。このようなミクロの環境要因のほかに，当時のハープスブルク帝国やウィーン社会の思想や学問の動向や状況など，フロイト個人のみならず，当時の人々に共通する思考や感性の基本的な枠組となったマクロの環境要因もある。

ふたつ目は，これも影響関係だが，より狭く，専門的なものである。フロイトの学説に対し，直接あるいは人を介して間接に影響を与えた学説や考えである。フロイトの学説はむろん独創的で画期的なものだが，そこにはフロイトと同時代あるいは前の時代の学者の唱えた説や考えあるいは概念や言葉がかなり使われている[1]。たとえば，リビドー Libido という言葉は，当時の学者の間ではふつうの用語であり，フロイトがはじめて用いたものではないし，無意識 unbewußt, Unbewußtsein, das Unbewußte という言葉も当時の学界・思想界ではかなり行き渡っていた[2]。フロイトの有名な抑圧 Verdrängung（ひとが無意識にある考えを意識から排除する・押し除ける）という考えも，フロイト以前から，ある考えが意識から排除されるという客観的記述的な意味でなら，後述するように，心理学ではごくふつうに使われていた。フロイトは既存の考えや言葉の意味を深め，あるいはそれに新しい意味を与えて，独自の発見を語る体系のなかで使用した。他人の用語や概念は，フロイトにとっては，発見のための手掛りや突破口となって，学説形成を助ける役割を果たした。フロイトに対し具体的な示唆を与えた人々には，ブロイアー，マイナート，シャルコー，ベルネーム，フェヒナー，ヘルバルト，ベーネディクト，ジャネなどがあげられる。精神分析理論の応用といってよい文化人類学や社会心理（群集心理）などの分野では，

ダーウィンやタルドなどである[3)]。

しかし，フロイトの学説を成立させたより本質的な真の要因は，フロイトの治療経験（症例分析）と自己分析である。この二つから得られた知見と洞察がフロイトの学説の独自の基本内容であるから，これがフロイトの学説の成立について語らなくてはならない三つ目のものになる。

以上が，フロイトの学説の成立を論ずる場合のおよその見取図である。

本稿で問題にしたいフロイトとヘルバルトおよびリントナー両者との関係は，この見取図でいえば二つ目のものに属する。ヘルバルト Johann Friedrich Herbart (1776—1841) は，ヨーロッパのみならず日本でも盛名のあったドイツの哲学者・心理学者・教育学者である。哲学ではライプニッツのモナドに似たレアーレ Reale を基本にした体系をたて，心理学では表象 Vorstellung[4)] の力学で心理過程（現象）を統一的に説明し，教育学では道徳的規律を目標にすえた教育体系を提唱した。ヘルバルト自身は，ドイツの大学を離れることはなかったが，ハープスブルク帝国ではヘルバルト学派が形成され，ヘルバルトの思想を広く普及させた。ヘルバルトの教育学は，ハープスブルク帝国の教育改革（19世紀後半）の基本理念ともなり，その心理学はリントナーによって編述され，ギムナージウムの教本として19世紀の後半およそ半世紀にわたってハープスブルク帝国で広く使われ，フロイトもこれをギムナージウムの最終学年で学んでいる。

フロイトとヘルバルトの関係で問題とされるのは，両者が心理過程を力動的に見た点である。フロイトの心の見方は，実は一元的ではない。フロイトは一つの観点からではなく，三つの観点から，心を合成的にとらえた。その方が経験的に実態に近く，理論的にも（病理を含む）心の諸現象を説明しやすく，また何より治療面で有効だったからであろう。

フロイトの心に対する三つの観点のうち，心に，意識・前意識・無意識という三つの領域（初期理論），あるいは超自我・自我・エスというやはり三つの領域（後期理論）を想定するのが，いわゆる局所論的観点といわれるものである。当時の医学界では，大脳について，大脳の各部位それぞれに特定の機能があるとする理解いわゆる大脳局所論が主流で，フロイトが研修医時代に師事したマイナートなども，この考え方を代表する学者であった。フロイトの考えた心の空間的構造も，ある意味ではこれと平行関係にあると見られなくもない。ただ違う点は，マイナートたちが心理過程を大脳や神経における生理的・解剖学的基礎（物質的過程や実体）と結びつけて理解しようとしたのに対し，フロイトは，心の三つの領域といっても，物質的基礎とは別に，ただ純粋に心の機能あるいは内容を考え，それを比喩的に表現しようとしたことである。

フロイトはまた，いわゆる情動——フロイトの場合は，怒り，恐怖，嫌悪，不快，驚愕，不安，歓び，落胆，憎しみ，（恋）愛，悲しみなど突発的で明確で，ある程度の激しさを伴う感情のほかに，漠然とした感情すべても含む——には，心的エネルギーが負荷されており，たとえば，そのエネルギーが当の情動から離れて身体へ流れていったものが，神経症の（身体）症状をひきおこすと考えていた。また心的エネルギーは，特定の心像（表象）につねに固定されているとは限らず，引き上げられて他のものに充当されるということも考えていた。フロイトの場合，人間の覚える快不快は，エネルギー量の減少と増大に関連

させられているし，いわゆる快感原則もこれで説明されている。エスの持つエネルギー（人間の持って生まれた基本的心的エネルギー）の一部が，自我や超自我のエネルギーに転化されて使われ，またリビドーが性目的のためばかりでなく，一部はやはり転化されて文化目標にも使われる（いわゆる昇華）ことになるとも考えていた。このように心的過程のすべてに，さらに心と身体をつなぐ通路に，エネルギーの移動や転化など，つねにエネルギー現象をみるのがエネルギー的（経済論的）な観点である。

さらにフロイトは，たとえば心には抑圧という機能があると考えていた。本人にとって不快であったり，認めたくない感情や考えや体験，恥かしかったり，社会的にも認められない考えや感情は，ひとは意識から排除し，忘れようとする。しかし，意識から追い払われた観念や体験の記憶は，心の外へ押し出されることにはならず，本人の無意識の世界へ追いやられるだけで，（たえず）再び意識の世界へ浮かび上ろうとするし，（たえず）意識に作用を及ぼす。心はそれを無意識のうちに検閲作用で抑えているが，この検閲がゆるむと，抑圧されていた観念は再び意識の世界へ浮かび上る。あるいは姿を変えて検閲をくぐりぬけて意識に現われ，あるいは身体症状の形をとって現われる。夢や錯誤行為（言い間違いなど）や神経症は，このような抑圧された無意識の観念や記憶によって引き起されるというのがフロイトの考えであった。心では――正確には，意識・前意識・無意識あるいは超自我・自我・エスの間で――つねに観念や記憶の力動が繰り広げられている。このように心を力動的な過程とみるのが，いわゆる力動的観点といわれる[5)]。

以上のようなフロイトの心に対する三つの観点のうち，最後の力動的な観点に関し，ヘルバルトとの関係が問題とされるのである。心を力動的にとらえる点で，フロイトはヘルバルトに似ているという指摘をはじめて行ったのは，1914年，ポーランドのカルピンスカであった[6)]。ついてドーラーがこれを論証しようとした[7)]。ジョーンズが論じ，バーンフェルトが指摘した[8)]。

カルピンスカは，フロイトの精神分析理論の概略を紹介する講演のなかで，フロイトの考えの基本的前提がヘルバルトと似ているのは，「意識の現象とその内部連関を理解するためには，無意識の心理過程も因果関係の要素として取り入れなならないしている点で，その時々の意識の状態は，識閾下で互に争っている心理的な諸力の結果であり，その識閾下の心理的諸力は，消滅したり壊されたりすることはなく，いつも作用している，この心理的諸力は，識閾を越えて意識の内へ入りこむことに成功しない場合でも，心のなかに意向 Streben として存在しつづけ，好機があればまた意識の内へ姿をみせようと構えている」[9)]と考えている点だという。ただ，フロイトとヘルバルトが違うのは，ヘルバルトが表象の動力学 Dynamik der Vorstellungen であるのに対し，フロイトの場合は，情動の動力学 Dynamik der Affekte であることだともいう[10)]。他方，ドーラーの論文では，ヘルバルトとフロイトの心理学の要点がそれぞれの紹介され，その類似の由来が，ヘルバルト→フェヒナー→フロイトという流れとヘルバルト→グリージンガー→マイナート→フロイトという流れにあるとされている。前者の流れが副，後者の流れが主とされているが，ドーラーのいうところを，まず副たる流れの方からみてみよう。

フェヒナー Gustav Theodor Fechner (1801—1887) は，ヘルバルトの心理学を受けつ

ぎ，それを独特な精神物理学に発展させた。心理（精神）現象は，生理現象と機能的につながっており，生理現象の表れと見ることができ，この生理・心理現象――かれの言葉でいえば精神物理現象 Psychophysik――にも，物理現象と同じように，エネルギー保存の法則が働いており，そのエネルギーは測定可能である。また，音や光などがある一定以上の強をもってはじめて人間の感覚器官に感知されるように，心理（精神）現象もある一定以上の強度をもってはじめて意識されるようになる。したがって，意識されていないものも，内的外的な契機である一定以上の強度を獲得すれば，識閾を越えて意識されるようになり，逆に，意識されているものも，ある強度を失えば識閾下に沈んで，意識から消える。しかし，無意識になった心理（精神）現象は消滅するのではなく存在し続け，意識に作用を及ぼす。心はたとえば氷山に喩えることができ，海面上の部分が意識，海面下の見えない部分が無意識で，その量的比率は１：８だと考えられるという[11]。

他方，ドーラーのいう主たる流れでは，ヘルバルトの心理学をグリージンガーが受け継ぎ，それをマイナートが受け，フロイトに伝えたとされている。

まずグリージンガーの学説である。グリージンガー Wilhelm Griesinger (1817—1886) は著名なドイツの精神医学者であった。グリージンガーの場合も，ヘルバルトと同じように，すべての精神現象を説明する基本が，表象である。すべての精神現象 das geistige Geschehen は，表象(すること)，その表象の運動や表象同士の争いの結果である。表象はそれぞれ強度を持ち，観念連合の法則に従って相互に結びついて群（系）をつくる。対立する（相反する）表象同士は，妨げあう。表象のうち，その時々に意識される表象の数は少なく，意識されないものの方が多いが，この意識されない表象は活動を休止するのではなく，つねに活動しており，意識にある少数の表象よりも大きな意味をもっている。また，身体が外界や生体内部から受ける刺激や印象は，意識されないものでも作用して，気分に影響を与え，その人の好みや共感あるいは反感の源泉となる。

表象には基本的に筋肉運動をめざす，いわゆる運動衝動があり，そこから欲求 Streben, 欲動 Triebe, 意志 Wollen が生じる。すなわち，その運動衝動が，脳を中心とする運動神経組織から生ずれば，それは欲求 Streben であり，感覚刺激からであれば欲動 Triebe であり，意識されている表象から生ずるのであれば，意志となって，それぞれ（充足を求めて）身体運動をひきおこす。

表象はそれぞれエネルギー（強度の元となるもの）を持っているが，これはそれぞれの表象に内在する固有のものではなく，本来脳が一元的に持っているエネルギーが分与されたものである。また脳は，表象にエネルギーを分与するばかりでなく，表象の座 Sitz であり，また欲求 Streben や意志 Wollen の座でもある。

苦痛や不快感は，ある表象が反対表象（群）に妨げられる（抑止される）ことから起こり，逆に，快は，類似の表象(群) によって促進されることから起こる。感情 Gefühle や情動 Affekte は，(自我に属する) 表象（群）を揺さぶり，このため表象（群）は，促進か妨げを受ける。このとき，感情より情動による影響の方が大きい。ただし，感情や情動が表象(群)に及ぼす影響は，各個人の体のつくり Konstitution あるいは素質 Disposition によって異なる。体のつくりと結びついた精神疾患の種類と強さも，個人の体のつくりま

たは素質によってちがう。

精神疾患にみられる自我の分裂とは，表象系が一つの中心ではなく，複数の中心点に別れて集まることである。なお，自我とは，感覚・思考・意志（Fühlen, Denken, Wollen）の容器のようなもので一つの抽象物である[12]。

このようなグリージンガーの説を受けたのがマイナートだとドーラーはいう。マイナート Theodor Meynert (1833—1892) はウィーン大学医学部のやはり有名な脳解剖学者であり，精神医学者であった。マイナートの所説は，ドーラーによれば次のようなものであった。

まず，完成された成人の脳で，大脳皮質を中心に脳の仕組と働きをみるとこうなる。外界や自分の身体からくる刺激は，脳の中枢へ伝えられる。脳中枢で刺激を受けとるのは，感覚繊維 Fühlfasern である。ここで受けとられた刺激は，脳皮質（の細胞内）で，それぞれ，音，光，温冷，重さ，長さ，広さ，色などに識別・転換され，今度はそれが投影繊維 Projektionsfasern（これを考えたところにマイナートの特徴がある）によって，大脳皮質の中空球の内へ向って，あたかもカメラの内へ外の景色などが投射されるように，世界像として投影され，意識化される。

こうして生まれた世界像は，大脳皮質に貯えられていく。大脳皮質の各細胞の間は，連合繊維 Assoziationsfasern でつながっており，このため推論作用も可能になる。大脳皮質ではつまり，世界像（経験像）の形成，記憶像の貯え，そして推論作用など，人間の通常の意識活動が行なわれる。大脳は意識の座であり，意識とは脳生活 Gehirnleben ということになる。

このような脳の仕組みや意識活動の仕組み自体は，人間に共通で，健常者はもとより，狂人でも同じである。

ところで，外界や身体からくる刺激の本体は，物理的な力であり，それは原子の運動に由来するものと考えられ，それが人間の神経末端でとらえられ，脳中枢へ伝えられて，音や光，重さや色などに識別・転換されても，それは基本的には力であることには変りがない。（人間の脳と神経がそれをさまざまに識別するにすぎない）

なおまた，外界や身体すべては，我々人間の意識の状態 Zustand unseres Bewußtseins であるので，それらすべては現象 Erscheinung であり，ただ一つの実在 das einzig Reale は，人間の意識だと考えられる。

大脳皮質で営まれる心理過程（マイナートの言葉でいえば脳生活）について，さらに詳しくみると次のようになる。マイナートは大脳皮質細胞に二つの機能を想定していた。ひとつは，脳の血管を収縮または拡張させて，皮質細胞への血流を増減させる役割である。血管が拡張すれば，皮質細胞へ流れこむ血液量が増え，細胞自体も大きくなる。皮質細胞内を流れる血液量が増えれば栄養供給状態が良くなる。血流と栄養供給は，ほぼ同じことになる。そこで，

1. 記憶像の強度は，皮質細胞の栄養状態による。栄養供給が多ければ，その記憶像は強度を増す。
2. 強度を増せば，記憶像は識閾を越えて意識化され，強度を失えば，識閾下に沈んで，

無意識となる。

3. 個々または全体としても，表象（生活）の強度は，大脳皮質の栄養状態に依存する（栄養状態が悪ければ，表象生活全体のレベルが低下する）
4. 皮質細胞への栄養供給量が少ないと，当の細胞は小さい（狭い）ままなので，そこを通過する連合（後述）に不快（苦痛）な情動が伴い，逆に，栄養供給量が多いと，細胞は大きく（広く）なるので，そこを通過する連合は，快（愉快）の情動が伴う。
5. 情動――マイナートが挙げるのは，たとえば，喜び，怒り，痛み，硬直などである――は，このように，大脳皮質細胞の栄養供給量に影響されるほかに，記憶像が（再生・連合において）促進されるかそれとも逆に妨げられるかに左右される。
6. 情動はそれぞれ（表象や記憶像と同じように），快か不快かという質的側面と強度という量的側面を持っている。
7. 人間は一般に，不快の減少を求めて行動する傾向を持っている。

大脳皮質が営むもう一つの機能は連合 Assoziation である。

1. 世界（外界）や自分（体内も）について知覚されたもの（個々の情報）が感覚器官や脳幹を通って大脳皮質に達し，そこで一つのまとまった像にまとめられる。外界(の事物)や自分について一つのまとまった像を形成するのが，連合の基本作用である。
2. また，記憶像は，半睡状態におかれているが，この連合によって目覚め，意識化されるようにもなる。連合のもう一つの機能はつまり記憶（像）の喚起である。
3. どの連合現象にも，かならず主連合と副連合が伴う。主連合とは秩序正しい思考過程に沿って行なわれるもので，副連合とは，副次的現象としてあらゆる方向に向って（無方向に）引き起されるものである。
4. 主連合の最高の目標は，脳内の像の間の関係を，外界（身体をふくむ）の対象の間の関係と一致させることである。つまり主観的連合を客観的連合と一致させることである。
5. 主連合によって形成された連合像は，人間社会に蓄積され，遺産として次の世代へ伝えられ，人類の知的財産はたえず増えていく。
6. 脳の能力の病的な低下によって，副連合が相互に結びつき，現実に合致しない（非現実的な）結びつきができ上るのが，狂気 Wahn である。
7. 副連合は狂気ばかりでなく，宗教や神話のもとになる。宗教や神話は，規模の大きい狂気と考えられる。
8. 主連合と副連合の違いは，次の点にもある。主連合は，攻撃表象と目標表象という二つの極の間で形成される。攻撃表象と目標表象が生まれる場所は，脳皮質の特定の部位であるが，その部位から連合路 Assoziationsbahn に（他の世界像や記憶像を引き寄せる）引き付けエネルギーが供給される。副連合は，攻撃表象あるいは目標表象の一方としか結びつかないから，連合路に供給される引き付けエネルギーの量はそれだけ少なく，主連合に比べれば，1：2である。

発達した成人の脳の大脳皮質の働きは以上のようになるが，脳にはこの大脳皮質の他にもう一つの部分もあり，そこはまた別の機能を営んでいる。この部分とは，マイナートが

皮質下部分と呼んでいる部分である。これも加えて人間の脳の全体の仕組みと働きをみると，次のようになる。

脳のうち人間の誕生時から働いているのは，皮質下部分で，大脳皮質は後に発達する部分である。皮質下部分は，飢え，渇きなど人間の生命維持に関係する中枢である。諸種の感覚の中枢でもあり，見て摑むなどの反射運動もこの中枢が行う機能である。この皮質下部分では，すべてが無意識の反射反応として行なわれる。

この皮質下部分に対応するのが一次自我 das primäre Ich である。飢え，渇き，その他の動物的刺激に支配されており，自分の生命・身体の欲求の充足しか考えられない狭い，利己的な性質を持っている。そこは，「子供的な」das Kindliche ところであり，無意識の攻撃と拒絶が行なわれ，(道徳的な) 悪 das Böse が形成されるところである。この一次自我は本来，寄生的で，まず母体，次いで他の人間の助けに依存し，それに寄生する。

しかし，やがて，飢えと運動という生体の基本的欲求のより完全な充足を求めて，大脳皮質が発達する。大脳皮質の発達によってはじめて人間は，外界や自分の身体に対し，意識的な思考や運動をすることができるようになる。子供はまず対象を，感覚的・具体的にとらえる段階をへて，抽象や推論の能力を身につけていく。先に述べた，中心的機能として連合が営まれるのもここであり，大脳は思考や記憶の中心となり，知性の座 Sitz der Intelligenz となる。

この大脳皮質に対応するのが，二次自我 das sekundäre Ich である。ここでは周囲の父や母など愛する人々が取り入れられるのをはじめ，外界が広く取り入れられ，自分のことばかりでなく他人のことも考えることができるようになり，利他の考えや社会性も生まれる。人間の道徳教化が可能になり，(道徳的) 善 das Guteもここで形成される。

二次自我は，思考し，意識的に活動し，社会性を持つのに対し，一次自我は，無意識的で，反射反応を行い，利己的であるにとどまる。二次自我は善で大人で，一次自我は悪で子供ということになる。

ところで二次自我と一次自我の関係で大切なのは，二次自我が一次自我を抑制する hemmen ことである。ただこの力関係は一方的なものではなく，一次自我の方が強い場合もありうる[13)]。

以上が，ドーラーによってヘルバルトとフロイトをつなぐ三者とされるフェヒナー，グリージンガー，マイナートの所説の (ドーラーによる) 概略である。

整理すると，こうなるであろう。

三者それぞれの説明の基本的立脚点は，フェヒナーが物理学的，グリージンガーが生理学的，マイナートが解剖学的および生理学的という違いはあるが，心理 (精神) 過程を表象の力学ととらえている点に基本的共通点がある。すなわち

1. 心理 (精神) 過程は，基本的に表象 Vorstellung の現象である
2. 表象は互に促し合う fördern か，妨げあう hemmen
3. 表象にはそれぞれ強度 Intensität がある
4. 表象は，一定以上の強度を持てば，識閾を越えて意識化され，ある一定の強度を失なえば，識閾下に沈んで，意識から消える

5. （その時々の）意識から消えた表象も，（類似性や連合などの）原因で，一定以上の強度を持てば，ふたたび識閾を越えて意識されるようになる

ということである。そして，三者ともに暗黙の前提としているのは

6. （その時々に）意識されている表象の数は比較的少なく，意識されていない表象の方がはるかに多い

ということであろう。すなわち，（今）意識されている表象とは，当人の注意力が今向っている対象——今考えたり感じていること——であるから，数に限りがある，ということであろう。

三者共通の認識は以上であるが，ほかに，フェヒナーやグリージンガーは，無意識となった表象は消滅したり活動を停止するのではなく，（たえず）意識へ作用を及ぼすと考えており，グリージンガーは無意識の表象の重要さを語る。また，グリージンガーとマイナートは，表象は単独で存在するのではなく，かならず類似等の理由により他の表象と結びついて表象群（系）として存在するという。

ところでドーラーが，ヘルバルトとフロイト両者の心理学の間にみられる基本的な類似点として挙げるのは

1. 表象は心のなかでは単独で存在せず，他の表象とつながって表象群（系）を形づくること（心の中味は，多数の表象群である）
2. 意識に存在する表象は，その時々ではごく少数で，残りの表象は（力関係で），意識されない心の部分に追いやられること
3. 無意識となった表象は，心の外へ排出されたり消滅したりすることはなく，心の意識されないところに貯められ，再び連想等によって強度をえれば意識の世界へ再登場する可能性があること
4. 心ではこうしてたえず表象間の力関係（力の法則）に従って，表象が意識へのぼったり（識閾を越える），逆に無意識へ沈んだりする（識閾下へ沈む）運動状態にあること

に加えて

5. 心とは一つの機械 Maschine あるいは装置 Apparat に比せられるものであり
6. この内部は力動状態にあるものの，しかし基本的には激しい力動ではなく，逆に静的な均衡 Gleichgewicht を求める傾向があること
7. 両者に，心身現象の把握がみられること

である[14]。

こうみてくれば，たしかにドーラーのいうように，ヘルバルトと中間の三者そしてフロイトの心理学の間には似ている点があるのは否めない。ただ，ドーラーがいうように，ヘルバルト→フェヒナー→フロイトという流れとヘルバルト→グリージンガー→マイナート→フロイトという流れが「歴史的に実在した」かどうかは簡単には決められない。ドーラーは，フェヒナーの著作はフロイトが直接読んだものだという[15]。だがいつ？[16] さらにまた，グリージンガーの学説が，マイナート本人がいうようにマイナートに受けいれられたのは確かだとしても，マイナートの所説がフロイトにどう受けとられたかは定かではない。

フロイトは医学部の学生として九学期目（1877／78冬学期）にマイナートの臨床精神医学の講義をきいた。そこで扱かわれていたのは，一般脳解剖学と精神薄弱 amentia の特定法であった。さらにフロイトは，ウィーン総合病院で1882年秋から1885年秋の三年間にわたり，神経科の専門開業医をめざして，研修医時代をおくり，この間，内科，外科，眼科，皮膚科など各専門の研修を積んだが，精神科は1883年５月から11月までマイナートの医局で研修した。フロイトはこのような研修活動とは別に，全研修期間を通して，マイナートの脳解剖学研究所に籍を置いて延髄の研究を行い，論文を発表した[17]。それは，脳や神経に関する解剖学的・組織学的知識が専門開業医として役に立つほか，将来，フロイト本来の志望のように研究者になる足掛りを残しておくためであった。ウィーン総合病院時代にフロイトが専門分野としてめざした神経学は，当時は，神経病理学とよばれ，脳や中枢神経の組織に関する知識を診断治療――といってもまだやはり治療より診断重視だった――に応用するものと考えられていたが，まだ学問としても病院の診料科としても独立しておらず，患者は各科にばらまかれていた。内科のシュルツ教授がこの種の患者に興味をもっていたことから，その第四内科に比較的患者が多く，フロイトもおもにここで（1884年４月―1885年２月），患者の診断と治療に当った。フロイトはやがて延髄の損傷による病気の診断で有名になり，扱った多くの症例のうちとくに三つをとりあげそれぞれ論文にまとめている[18]。たとえばその一つは，若いパン職人を襲った（肺炎および心内膜炎も併発して死亡）「脊髄および脳神経の急性多発性神経炎」Akute multiple Neuritis der spinalen und Hirnnerven（診断・治療は1884年10月３日から12月12日。発表は1886年）で，この病気は別名「灰白脊髄炎」といい，ウィーンではじめての症例であった[19]。フロイトは三年にわたるウィーン総合病院での研修を終えると，神経病理学の完成を目的にパリのシャルコーのもとに留学(1885年10月―1886年２月)，ウィーンに帰った後，わずかの間だが（1886年11月頃まで）[20]，ふたたびマイナートの脳解剖学研究所で研究活動を行った。かって学生時代，フロイトはマイナートの講義を医学の専門科目ではただ一つおもしろいと感じもし，研修医時代にはマイナートを尊敬し，またマイナートから後継者に誘われたが，フロイトはマイナートから具体的に何を学んだかは，口にしていない。だが，学んだものが心理学でないことは，ほぼ確かではないか。今みてきたような師弟関係からすれば，両者をつなぐのは主に脳解剖学であろう。この師弟関係を全体としてみれば，ドーラーが主張するように，心理学の知見について影響関係が歴史的に実在したとはいいきれないのではないか。あるとすれば，状況証拠というべきものであろう[21]。

状況証拠といえば，ウィーンの医学界自体にはそのような状況証拠がたくさんみられた。そもそもヘルバルトの哲学，そしてその一部をなす心理学は，19世紀の後半にはウィーン大学に広く知られ，学者たちの常識の一つであったといわれる。当時の学者たちは，医学や理数系の学者でも，哲学や文学，絵画，音楽などに明かるく，それも，興味や関心があるという域を越えて，かなり高度の専門的知識をあわせもっていることが多かった。そして事実，その方面で専門的論文を書いた学者も少なくない。フロイトの師とされる学者たちも同じように，複数専門あるいは多芸な学者が多かった。マイナートもブリュッケもブロイアーもそうである。かれらもヘルバルト哲学を知っており，高く評価していたとい

う[22]。だから，マイナートに限らず，ブリュッケなど他の学者たちも，ヘルバルトの哲学や心理学をフロイトに伝える接点である可能性は十分にありえた。ただし，これもみな状況証拠である。

フロイト自身はなかなかの読書家であった。アンジューによれば，1901年まで，つまりフロイトが精神分析の骨格を完成させる頃までに，フロイトが論文や著作，マルタへの手紙やフリースへの手紙で引用また言及している作家・思想家などは大変多い[23]。ドイツ，オーストリア，スイスなどドイツ語圏のものでは，もっとも多いゲーテ，次いで多いシラー以下，『ニーベルンゲンの歌』，ビュルガー，フルュヒゴット，ヘルダー，コルトゥーム，レッシング，リヒテンベルク，ヴィンケルマン，ハイネ，グリム兄弟，C. F. マイアー，F. ロイター，クライスト，グリルパルツァー，ヘルツル，O. パニッツァ，ジャン・パウル，ノヴァーリス，フッシュ，J.-J. ダーフィト，フォンターネ，ケラー，O. ルートヴィヒ，シェフェル，シュニッツラー，フィッシャー，フルダ，L.シュナイダー，ヴィルブラント，A. グリューン，レーナウ，ウーラントその他多数の歴史家，（古典古代の）神話学者と考古学者。哲学では，カント，シェリング，ブレンターノ，ハルトマン，ショーペンハウアー，ニーチェ（マルクスとヘーゲルは読まない）。英語圏では，第一にシェークスピア，他にホッブズ，スウィフト，ミルトン，A. スミス，J. S. ミル，スペンサー，ダーウィン，G. エリオット，キプリング，キングスレー，ハガード，スウィンバーン，テニソン，M. ミュラー（インド学者），ガルトン（心理学者），ボールドウィン（アメリカの心理学者）である。（有名な W. ジェイムズは読んでいない）。フランスでは，ラブレー，モリエール，ヴォルテール，ルソー，ユゴー，ティエール（歴史家），サルドゥー（劇作家），デュマ・フュス，ドーデ，フランス，モーパッサン，ゾラ，P. ブルジェ，ビネ（心理学者），テーヌ（心理学者）。北欧では，イプセン，ナンセン（探険家），アンデルセン，ヤコブセン。他にアラビアの10世紀の文学『マカーマート』，インドの同じ10世紀の『ヒトパデーシャ』である。アンジューもいうように当然，これですべてが尽されているのではないであろうが，ここにはヘルバルトの著作は入っていない。1901年以降もフロイトは著作や書簡ではヘルバルトに言及することはなかった。現在ある全集や著作集，各種の書簡集にヘルバルトの名は見えない。

ただ一ケ所だけ例外で，ヘルバルトの名がみえる。その一ケ所は『夢の解釈』（1900）にある。フロイトはとくに第一章「夢の諸問題に関する学問的文献」を設けて，過去の夢の研究成果を概観している。それまでの夢の研究は，問題別にみれば，

a）夢の覚醒生活に対する関係
b）夢の材料――夢に現われる記憶
c）夢の刺激と夢の源泉
d）夢は覚醒後なぜ忘れられるか
e）心理学的にみた夢の特長
f）夢における倫理的感情
g）夢の理論と機能
h）夢と精神疾患との関係

になるとし，ヘルバルトにg）のところで触れている。フロイトによればヘルバルトは，夢とは睡眠によって精神の活動能力が低下した結果生じるもので，夢の荒唐無稽や飛躍，不合理や不統一はそれに由来し，睡眠がしだいに覚醒に移行するにつれて夢の不合理なところも減少し，完全に覚めれば通常の論理的で集中的な思考活動が回復する，と考える学者の一人である。この学者たちは，つまり，覚醒状態における精神活動を標準とし睡眠状態における精神活動は不完全なものとみるのである。フロイトはヘルバルト自身の言葉も引用し，夢とは「徐々の，部分的で，しかし正常なものとは大いに隔りのある覚醒」“ein allmähliches, partielles und zugleich sehr anomalisches Wachen”の結果生まれものと紹介している[24]。ちなみに，先にあげたフェヒナーなども，夢は「半覚醒」の産物だとみていた。フロイトによれば，このように夢を説明するのが当時の医学者・生理学者の間では支配的で，ヘルバルトやフェヒナーの他に，夢の研究家として名高いモリ Maury（フランス）なども ここに入る[25]。

ところで，この第一章は『夢の解釈』では最後に書かれた。フロイトは，患者や自分の夢の分析を通して，「夢は（偽装された）願望充足である」という結論に達し（1895年），夢の仕組みの説明と分析例からなる『夢の解釈』を書いた。最後に，学問的体裁を整えるために，従来の諸文献（78点）を調べ，諸説をテーマ別に整理し概観した。この夢の本に限らず，神経症や夢の仕組みなどフロイトの精神分析本来の著作は，フロイトがそれまで神経学者として書いてきた学術論文（1897年までにおよそ15編）[26]が，専門文献をことごとく検討した上で自説をのべるという学術論文の典型にならっているのとは対照的に，おもに自分および患者の観察から仮説を立てるという手続きによって書かれた点に特色がある。フロイトが神経症の専門家あるいは心理学者として書いた著作は，その成立が，神経学の学術論文とはこの点，異なるのである。しかも，『夢の解釈』を書いた頃には，フロイトの精神分析理論の骨子はすでにでき上っていた。したがって，『夢の解釈』におけるヘルバルトへの言及は，フロイトの心理学の成立に直接結びつけて語れない。

リントナーの編述した『経験的心理学教本』なら，ヘルバルトとフロイトをつなぐより確実な接点といえるだろう。これとて間接的なものに違いないが，フロイトはともかくこれをギムナージウムの最終学年で使用した[27]。フロイトは大学入学以前からヘルバルトの心理学のおよそのことを知っていたと推定される。ただどの程度か，そしてどれだけ深くかとなれば，これは推定もむづかしい。いずれにせよ，ヘルバルトの心理学は，フロイトが大学入学時にもっていた（体系的な）心理学の基礎知識の源泉であり，心理学的にものを見るときの一つの視点であったという程度のことはいえるであろう。ではその教本は，どういう内容をどういう体系で語っていたのか。それは次回みたい。

注

注は，a，b，c……の略号による。

a．Ellenberger, Henri F.: The Discovery of the Unconscious. The History and Evoluton of Dynamic Psychiatry, New York 1970

b．Pongratz, Ludwig J.: Problemgeschichte der Psychologie, München 1984

c.『精神分析用語辞典』J. ラプランシュ/J.-B. ポンタリス（村上仁監訳），みすず書房1977

d. Karpinska, Luise von: Über die psychologischen Grundlagen des Freudismus. In: Internationale Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyse, 2. Jg., 1914, 307-326. 雑誌掲載は1914年だが，もともと1912年12月に，第二回ポーランド神経学・精神医学・心理学学会（クラクフ）で発表された。

e. Dorer, Maria: Historische Grundlagen der Psychoanalyse, Leipzig 1932

f. Andersson, Ola: Studies in the Prehistory of Psychoanalysis, Stockholm 1962

g. Anzieu, Didier: L'auto-analyse de Freud et la découverte de la psychanalyse, Paris 1959, Nouvelle édition 1975

h. Sigmund Freud. Gesammelte Schriften. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Leipzig/Wien/Zürich 1925

i. Brun, R.: Sigmund Freuds Leistungen auf dem Gebiet der organischen Neurologie. In: Schweiz. Arch. Neurol. Psychiat 37, Nr. 2(1936), 200-207

j. Lindner/Fröhlich: Lehrbuch der empirischen Psychologie als induktiver Wissenschaft. Nach dem gegenwärtigen Stande der Wissenschaft neu bearbeitet und ergänzt von Gustav Fröhlich. Zehnte verbesserte und vermehrte Auflage, Wien 1891. リントナーの教本（初版は1858年）をリントナーの死後，増補したものだが，増補部分はわずかである。

k. Bernfeld, Siegfried: Sigmund Freud, M.D., 1882—1885. In: The International Journal of Psycho-Analysis, vol. 32(1951), 204—217.

l. Bernfeld, Siegfried: Freud's Earliest Theories and the School of Helmholz. In: Psychoanalytical Quarterly 13(1944), 341—362. なお上記二論文は Siegfried Bernfeld/Suzanne Cassierer Bernfeld: Bausteine der Freud-Biographik. Eingel., hrsg. u. übers. von Ilse Grubrich-Simitis, Frankfurt a. M. 1981 に収録されている。

m. Gicklhorn, Renée: Eine Episode aus S. Freuds Mittelschulzeit. In: Unsere Heimat, XXXVI (1965), 18—24.

n. Freud, Sigmund. Gesammelte Werke 18 Bde. Bände 1—17 London 1940—1952, Band 18 Frankfurt a. M. 1968. Die ganze Edition seit 1960 bei S. Fischer Verlag, Fnankfurt a. M.

1) a 534頁参照

2) b 175—202頁参照

3) a 534—539頁また526，528頁，b 208頁参照

4) ヘルバルトの心理学の基本用語となっている表象とは，j 27—28頁の説明によれば，まず，感覚的刺激によって(意識内に）生ずる色，音，匂い，味，快や痛みであり，原因となった刺激が消えてもなお続くものもある。さらに（眼前にはいない）友人とか（冬に思い浮かべる）春の美しい光景なども表象である。それからより抽象的な次元の観念や概念，考えや理念も表象である。神，徳，力，数などがその例である。

5) c 82，94，482頁参照。また n 第14巻85頁「私は動力学 Dynamik，局在論 Topik，および経済論 Ökonomie という三つの座標軸によってすべての心理過程を見る見方をメタ心理学 Metapsychologie とよんだのである」(『自らを語る』1925)

6) d

7) e

8) l。また b 205—206頁，f 9頁，g 67頁参照

9) d 309頁

10) d 310頁

11) e 106—111頁
12) e 160—170頁，また129，176頁
13) e 133—142頁
14) e 103—106頁
15) e 112頁
16) n 第14巻 86頁（『自らを語る』1925）のフロイト自身のことばからは，いつとは決めがたい。
17) d 212頁また g 759頁
18) d 213—214頁
19) d 214，217頁。また n 第1巻469—470頁。
20) g 762頁
21) b 206頁
22) g 66頁
23) g 146—149頁
24) h 81頁。なおこの著作集は『夢の解釈』（1900）の初版をそのまま第2巻に再録し，1909年以降の増補部分は別にして第3巻にまとめてあるので，初版の内容を知るのに便利である。
25) h 82頁
26) i 206—207頁。また k 213—215頁，n 第1巻463—487頁参照
27) m 24頁によれば，フロイトがギムナージウムの最終学年（1872/1873）で学んだ科目と成績は次の通りである。リントナー編の心理学教本はこのうち「哲学および(大学）基礎学科講義」で使われたものであろう。

		第一学期	第二学期
Religionslehre	宗教	優	優
Deutsche Sprache	ドイツ語	優	優
Lateinische Sprache	ラテン語	優	優
Griechische Sprache	ギリシャ語	優	優
Geographie u. Geschichte	地理および歴史	良	良
Mathematik	数学	良	良
Naturwissenschaft	自然科学	良	良
Philosophie u. Propädeutik	哲学および(大学)基礎学科講義	優	優
Allgemeine Naturkunde	博物学	優	優